

肢体不自由特別支援学校における音楽の活用に関する考察

—— 重度・重複障害児を担当する教師に対するインタビュー調査から ——

高橋 結*・新井 英靖**

(2017年10月25日受理)

Using Music in Special Schools for Children with Profound and Multiple Disabilities

Yui TAKAHASHI and Hideyasu ARAI

キーワード: 肢体不自由特別支援学校, 重度重複障害, 音楽, インタビュー調査

重度重複障害児への音楽の活用に関しては、自傷行動を有する重度重複児へ音楽を活用し、行動の変化を検討した研究(中山・小林,2000)や、特別支援学校(知的障害・病弱・肢体不自由)で音楽療法を応用した実践に関する研究(丹波・大谷,1997)などの研究があるが、さまざまな場面で活用されている音楽について、教師がどのようなねらいをもって、どのように用いているかについては、これまであまり分析・検討されてこなかった。そこで本研究では、肢体不自由特別支援学校で重度重複クラスを担当する教師に対してインタビュー調査を行い、肢体不自由特別支援学校における音楽の意義や活用方法の特徴を明らかにすることを目的とした。事前に作成した質問事項にそって、できる限り調査対象者に思いや考えを自由に語っていただき、1名につき15～20分程度の半構造化面接を行った。録音したデータを文字起こしし、研究の目的に沿ったねらい・意図を抽出し、概念化した結果、重度・重複障害児に対し学校で音楽・音楽活動を活用するねらいは、①生活リズムを生み出し、活動への意識づけとすることや、②コミュニケーション・ツールとして活用すること、③情緒の安定を図り、学習活動の「楽しみ」として活用していることが明らかになった。

はじめに

人間にとって音楽とは生活の一部であり、生活を豊かにするものである。これは、肢体不自由児にとっても同様であり、実際に特別支援学校の教育活動を見わたすと、音楽の授業以外にも音楽を多く使用している。特に重度重複障害児のクラスでは、朝の会や帰りの会など音楽の授業以外にも音楽が活用されていることは周知のことであろう。

これまで、特別支援教育における音楽の活用に関する研究では、自傷行動を有する重度重複の子

*茨城県立水戸特別支援学校 **茨城大学教育学部

どもに対して音楽を活用して、行動の変化を検討した研究など、障害を改善するためのツールとして音楽が活用されているという報告がある(中山・小林, 2000)。また、実践的な面でも、音楽療法の考え方を応用して音楽の指導を展開しようとする研究などがあるが(丹波・大谷, 1997; 関原, 2008 など)、肢体不自由特別支援学校で、さまざまな場面で活用されている音楽について、教師がどのように音楽を用いているのか、そして、そのねらいは何かという点は、これまで詳細に分析・検討されてこなかった。

そこで、本研究では肢体不自由特別支援学校で行われている音楽活動に関して、肢体不自由特別支援学校で重度重複クラスを担当する教師に対してインタビュー調査を行い、肢体不自由特別支援学校における音楽の意義や活用方法の特徴を明らかにすることを目的とした。

研究の方法

1. データ収集の方法

上記の目的を明らかにするために、質的研究(半構造化面接法)の手法を用いた。具体的には、肢体不自由特別支援学校で重度重複障害児を担当する教師に対してインタビュー調査を依頼した。研究協力の承諾を得られた5名の教師に対して、①日常的に用いている音楽活動の内容と、②音楽活動をどのようなねらいで用いているのかについて聞き取りをした。

2) インタビュー実施日および場所

インタビュー調査は2016年7月28日、8月4日に実施し、実施場所はA特別支援学校の教室とした。インタビューを行う際、事前に本研究について説明した上で、了解を得て会話をボイスレコーダーに録音し、1名につき20分から30分程度のインタビューを実施した。

3) 録音データの分析方法

記録したデータを分析する際には、質的研究の手法にのっとり、録音した内容を全て文字起こしした。そのうえで、音楽活動の特徴や、教師の考えている音楽の教育的な意義やねらいについて各教師に共通点があると考えられる内容を抽出し、研究の目的に沿って概念化していった。

生活リズムを生み出すための音楽

1) 生活の区切りを生み出す音楽

はじめに、教師が一日の様々な場面において活用している音楽の意図やねらいをまとめたところ、以下のような結果が得られた(表1)。

たとえば朝の会で歌を歌っていることについて、各教師は共通のねらいを語った。すなわち、A教師は一日の始まりには、「横のなめらかな旋律よりは縦のリズムがあるような歌とかの方が、元気が出る(表1波線①)」と述べているように、曲の流れを意識しながら音楽を選択し、児童に一日の

始まりを意識づけるために活用していると述べていた。同様に、B 教師も「おうちに帰るんだとか学校が終わりなんだなっていう場面の切り替え（表 1 波線②）」に音楽を活用していると述べているように、生活するなかで「場面の切り替え」として音楽を活用していることが語られた。

C 教師は「朝の会で使う歌はこれっていうふうに決めて、毎日繰り返すことで、あっ、この歌がなったら朝の会が始まるんだ〜とか、あっ、この歌だったら、あっ、お返事をするんだな〜っていうような」と述べているように（表 1 波線③）、「朝の会である」ということを意識づけるために音楽を活用していると述べていた。同様に、朝の歌は「これから学校が始まるよ（D 教師：表 1 波線④）」とか、「朝の会が始まるっていうことをわかってもらうために（E 教師：表 1 波線⑤）」というような「合図的なこと」として音楽を活用していると述べた。

以上のように、インタビューをしたすべての教師が、何かの活動が始まる時に音楽を活用していた。これは、生活の変化を感じられるように音楽を活用しているということを意味していると考えられる。

表 1 生活の区切りを生み出す音楽

A 教師	一日の始まり、①横のなめらかな旋律よりは縦のリズムがあるような歌とかの方が元気が出るし、一日の始まりをわくわくと迎えるためには、こういうちょっとはやめの曲の方がいい。
B 教師	朝の会と同じように、この歌を歌ったら、②おうちに帰るんだとか学校が終わりなんだなっていう場面の切り替えのためにとっています。
C 教師	多分 1 年生の時から使っているって去年の先生は言っていたと思うんですけど、やっぱりその重度のお子さんっていうのは、なかなかその 1 回やって、すぐに身につくっていうのは、すごく まあ 難しい子たちなのかなっていうのが自分の中にあるので、③朝の会で使う歌はこれっていう風に決めて、毎日繰り返すことで、あっ、この歌がなったら朝の会が始まるんだ〜とか、あっ、この歌だったら、あっ、お返事をするんだな〜っていうような。そういう、なんか、意識づけのねらいで、はい、使っています。
D 教師	朝のうたはやっぱりこう どちらかという、④これから学校が始まるよっていう、合図的なことで、はい、朝の歌を歌うようにしているのかなっていうところですね。
E 教師	やっぱり⑤朝の会が始まるっていうことを分かってもらうためにかなって思います。朝の会なんだよって。

2) 活動への意識づけの役割を果たす音楽

生活のリズムを生み出すための音楽というと、始業時のチャイムのような活用となるが、インタビューをした教師からはそうした時間を知らせることばかりでなく、学習活動へと切り替えるために音楽を活用していたことが語られた（表 2）。具体的には、A 教師は「始まりを意識するためにこの曲が鳴ったら音楽が始まるよっていう意図をもって、こう教師とかもってきてくれたので、なんというんですか切り替えるタイミング（表 2 波線①）」と述べているように、学習活動の始まりを知

らせる役割があると認識していた。これは、「この曲の間に音楽に集中できるようにというか、一緒に歌ったりとかリズムに乗ったりすると、まあなんとなくだと思んですけど、こう音楽の授業に向けて切り替わっていくのかなっていうふうに思います (表 2 波線②)」という発言でも確認できる。

表 2 活動への意識づけの音楽

<p>A 教師</p>	<p>世界中の子どもたちが音楽を始めるときにいつもかかったりする音楽で、①<u>始まりを意識するためにこの曲が鳴ったら音楽が始まるよっていう意図をもって、こう先生とかもってきてくれたので、なんていうんですか切り替えるタイミング</u>というか今まで音楽 5 時間目にあるので、給食終わって、休み時間終わって、音楽に切り替えようねっていうときに、②<u>まあこの曲の間に音楽に集中できるようにというか、一緒に歌ったりとかリズムに乗ったりすると、まあなんとなくだと思んですけど、こう音楽の授業に向けて切り替わっていくのかな</u>っていう風に思います。</p> <p>(中略)</p> <p>音楽の授業では、やっぱりこう参加してほしいというか、子どもたちも参加できる曲とか、あまりに速すぎる曲でもだめだし、こうクラシックとか偏りすぎてても、ちょっと興味とは離れたところだったりするので、子どもの興味とか関心に合わせて子どもも参加できる音楽っていうのを結構選んだりして。</p> <p>(中略)</p> <p>楽しい活動、ちょっとわくわくする活動のときにはちょっと速い音楽、ゆっくり過ごそうねっていうときにはゆったりとした音楽をかけたりとか個人的に思っています。</p>
<p>B 教師</p>	<p>③<u>普通に挨拶をするよりは、何をしているのか分かりやすいからなのかな</u>と思っています。</p> <p>(中略)</p> <p>朝の会とか帰りの会とかだと特に、あと自立活動もそれもあるんですけど、歌というものを通して、場面の切り替えとか活動を見通すために使われていることが多いのかな、音楽以外の音楽は。</p>
<p>C 教師</p>	<p>④<u>どちらかという、何かのその活動があつて、何かをねらいとする活動があつて、それに合わせてプラスαで、こう音楽をくっつけていく</u>というような、使い方をしてるかなと思います。</p> <p>(中略)</p> <p>ゆったりした曲がかかったら、気持ちもあと身体の緊張とかもリラックスしていけたらいいなとも思うし、逆にその⑤<u>体育とかそういう授業で使う音楽とか</u>だったら、やっぱり子どもがアクティブに動けたらいいなと思うから、ちょっとアップテンポの盛り上がるような音楽とかを使いたいなと思うので、</p>
<p>D 教師</p>	<p>みる・きくだと、お話しとかを音楽で流したりっていう。⑥<u>これもやっぱり楽しい雰囲気の中で、何かをやっているって</u>いうことを、意識させるっていったところで使っているかな。</p>

また、B教師は、「普通に挨拶をするよりは、何をしているのか分かりやすいからなのかなと思っています(表2波線③)」とあるように、今、行っている学習活動をより意識づけられるようにするために音楽を活用していると述べた。C教師は、「どちらかという、何かの活動があって、何かをねらいとする活動があって、それに合わせてプラスαで、こう音楽をくっつけていくというような…使い方をしているかなと思います(表2波線④)」と発言しているように、活動に合わせて音楽を使っていた。加えて、「体育とかそういう授業…で使う音楽とかだったら、やっぱり子どもがアクティブに動けたらいいと思うから、ちょっとアップテンポの盛り上がるような音楽とかを使いたいと思うので(表2波線⑤)」と述べているように、音楽を通して活動を促進していくこともねらっていた。同様に、D教師も、「これもやっぱり楽しい雰囲気の中で、何かをやっているっていうことを意識させるっていったところで使っているかな(表2波線⑥)」と述べているように、音楽を授業の活動を楽しい雰囲気にさせるために活用していた。

以上のように、肢体不自由特別支援学校の教師は、単にチャイムのような「時間の区切り」を意味するのではなく、むしろ学習内容を伝えるために音楽を活用していることが示唆された。

表2 コミュニケーションとしての音楽

B教師	自分がこれがしたいことを伝えるためにどうしたら、例えばその子は今自分ではCDかけられないので、やってもらわないとできない。で、① <u>やってもらいたい気持ちをどう伝えるか、コミュニケーション能力を高めるための道具にCDを使っているというパターンがあります。</u>
C教師	例えばなんかそのブルブルしてるな、緊張してるなってなんか興奮してるなっていったときに、落ち着いて誰々君って言っても、やっぱりあんまり響かないっていうか、子どもたちも、ああ何言われてるんだらうって思うところがあるのかなって思うけど、でもそこで静かな音楽を流して、ちょっと落ち着いた環境に整えてあげたら、だんだんこう気持ちがクールダウンしていったりすることもできるので、うーん なんかほんとに、② <u>ある意味、そのコミュニケーションの一つとしても使えるかな、働きかける側としては、今こういうことをやってほしいな、こういう気持ちになってほしいなっていうときに音楽は使える。</u>
D教師	なんかこう、④ <u>コミュニケーションが上手く図れるような手段に使えていったらいいのかなっていうところでしょうかね。朝の歌なので、③おはようとかっていうあいさつのことばみたいなのをに入れていけたら。</u>

コミュニケーションのツールとして音楽を活用する

(1) コミュニケーションとしての音楽

一般的に学校では、これから始まる学習活動の内容を子どもたちに伝えるときには、言葉(音声言語)を用いることが多いであろう。しかし、重度・重複障害児は障害が重いために言語指示では

理解できないことが多いので、音楽を活用していた。これは、音楽がコミュニケーションの役割を担うということの意味していることでもあり、インタビューでは、コミュニケーション・ツールとして音楽を活用しているという意見も多く述べられた(表3)。

具体的には、B教師は「自分がこれがしたい」ということを子どもが伝えるために音楽を用いていると述べていた。たとえば、「やってもらいたい気持ちをどう伝えるか」というコミュニケーションのツールとして活用していると指摘した(表3 波線①)。同様に、C教師は「ある意味、…コミュニケーションの一つとしても使えるかな、働きかける側としては、今こういうことをやってほしいな、こういう気持ちになってほしいなっていうときに音楽は使える(表3 波線②)」と述べた。

さらに、D教師は、「コミュニケーションが上手く図れるような手段にできていったらいいのかな(表3 波線③)」と述べたうえで、「おはようとかっていうあいさつのことばみたいなのをに入れていけたら(表3 波線④)」という発言にみられるように、より積極的に意思表示ができるように音楽を活用しようと考えていた。

表3 学習内容を伝えるための音楽の活用

A 教師	<p>音楽の授業以外ではほんとに自由なので、子どものまあ好きなものとか、①<u>例えばその子が気持ちが落ち着かない時には、好きな音楽かけるとか、あとは、楽しいっていう雰囲気だけで、なんかあと一歩足りないというか、ここ無音にしとくのがもったいないなとか、感覚的な感じなんですけど、今から楽しいことやるよっていう前にちょっとわくわくするものかけたりとか、あとは競争している時には、なんかそれこそ何とかレンジャーみたいな音楽かけたり、ほんとにこう縛りが無いので、さすがに音楽の授業で何とかレンジャーやるのはどうかなっていう風にちょっと思うので、指導要領とか基にある教科書とかいろいろ考慮すると、ちょっとどうかなってあるので、音楽の授業以外の時には、ピタゴラスイッチ好きな子もいるのでかけたりとか、なんかその子どもたちの雰囲気とかこれから展開していきたいことに向けて、使い分けたりしていると思います。</u></p> <p>(中略)</p> <p>②<u>周りを見て、例えば魚釣りだったら、ちょっと魚に関するおさかな天国とか流したり、そうですね その、③T1の先生がやる活動に合わせて、雰囲気をつくれるような音楽というか視覚的にもものを捉えることだけが、ことが難しい子がいるので、それは聴覚とか周りの明るさとかそういうのも考えながら、雰囲気とかムードをつくっていければと思って。夏とかは結構楽しい雰囲気なので、そういうときにはなんか似たようなリズムとか雰囲気のものをもってきたりしましたね。</u></p>
B 教師	<p>④<u>場面をこの歌だと、次にこういうことがあるとかっていうのをわかりやすくするために歌というのを使っているのだと思います。</u></p>
D 教師	<p>歌を歌える子どもたちには、歌詞をこうしっかり覚えさせて、歌い方とかも教えながらやっていくんですけど、⑤<u>重度重複の子どもたちは、歌を歌える子どもと、そうではない子どもがいるので、えー、歌を歌える子どもの声を聴かせつつ、雰囲気のをつくるっていうようなところとか、やっぱり繰り返し聴いてることで、歌えないけど、聴いて入ってきて、</u></p>

聴いてことのある曲だっという耳，なじみのある曲にしていこうかな～っという風にねらっているところですね。

(2) 音楽を通して学習内容を伝える

さらに、コミュニケーションという視点から音楽をとらえた場合、学習内容を音楽で伝えることもできる。インタビューでは、音楽にはこうした役割があるという発言もあった。

たとえば、A 教師は、「今から楽しいことやるよっという前にちょっとわくわくするものかけたりとか、あとは競争している時には、なんかそれこそ何とかレンジャーみたいな音楽かけたり…」と述べているように、次に展開される学習活動の内容（雰囲気）を音楽で伝えようとしていた。特に、「その子が気持ちが落ち着かない時には、好きな音楽かけるとか、あとは、楽しいっという雰囲気だけど、なんかあと一歩足りないというか、ここ無音にしとくのがもったいないなとか、感覚的な感じなんですけど」と述べているように、A 教師は授業の活動に合わせて児童たちが活動に入れるように音楽を活用していた（表 3 波線①）。

具体的には、A 教師は、「周りを見て、例えば魚釣りだったら、ちょっと魚に関するおさかな天国とか流したり（表 3 波線②）」、「T1 の教師がやる活動に合わせて、雰囲気をつくれるような音楽というか視覚的にもものを捉えることだけが、ことが難しい子がいるので、それは聴覚とか周りの明るさとかそういうのも考えながら、雰囲気とかムードをつくっていければと思って（表 3 波線③）」というように、学習内容の理解を促進するために音楽を利用していた。

また、B 教師は、「場面をこの歌だと、次にこういうことがあるとっというのをわかりやすくするために歌というのを使っているのだと思います（表 3 波線④）」と述べていた。さらに、D 教師は、重度重複障害の子どもたちは「歌を歌える子どもと、そうではない子どもがいるので、歌を歌える子どもの声を聴かせつつ、雰囲気をつくる（表 3 波線⑤）」と述べているように、音楽を授業の雰囲気づくりに活用していた。以上のように、学習内容を伝え、授業の雰囲気を作り出すために音楽を用いていることが明らかになった。

(3) 季節の意識づけのための音楽

さらに、インタビューでは、子どもたちに季節を感じてもらえるように音楽を活用しているという意見が出された。たとえば、D 教師や E 教師は「季節の歌」を意図的に活用していることが述べられた（表 4）。

この点について、A 教師は「流れてくる音楽とかもゆったりであって、音のつよさとかもそんな強い感じじゃな」いものを使って、「季節を意識するには適している」と述べており（表 4 波線①）、曲の流れや音の強さを意識しながら音楽を活用していた。また、C 教師は「季節感を大事に、音楽とリンクさせていくようなねらいがある」と述べている（表 4 波線②）。

具体的には「その雰囲気を感じて、あ～海行ったことないけど、こういう音がするんだな～、あっ、これ学校で、昔聴いたことあるな～っと思ってくれて、それで、ああなんかちょっとなじみがあっ、なんか楽しかった気がする」と述べているように（表 4 波線③）、「季節を意識する」ということをねらって音楽を活用していた。そして、こうした音楽の活用は、重度・重複障害児が日常生活で経験が制限されていることや、将来の生活をふまえて意図的に行われていることであることが示唆された

(表4 波線④および⑤参照)。

表4 季節を感じるための音楽

A 教師	<p>春の小川が歌唱と鑑賞を兼ねてたんだと思うんですけど、このときに鈴の付いた長いロープを使って、で自分の思う、こう、なんていうんですかね、リズムとかをそのロープをゆらすことで、激しくゆらすのか、ゆっくりこうリズムに合わせてゆらすのか…、テンポも速すぎず、その、①<u>流れてくる音楽とかもゆったりであって、音のつよさとかもそんな強い感じじゃなく、なんか春とか季節を意識するには適していたかなと思います。</u></p>
C 教師	<p>②<u>季節感を大事に、音楽とリンクさせていくようなねらいがあるのかなって思います。</u> (中略) ③<u>その雰囲気を感じて、あ～海行ったことないけど、こういう音がするんだな～、あつ、これ学校で、昔聴いたことあるな～って思ってくれて、それで、ああなんかちょっとなじみがあって、なんか楽しかった気がする、なんかそういう感じで、うん、子どもたちがなんか思ってくれるだけでも、私はほんとに重度の子はいいのかなって思ってます。</u> (中略) あえてこうねらいに絡ませるとしたら、やっぱりそのああいう子たちって、やっぱり外で活動する経験っていうのが、④<u>健常者のお子さんに比べて、圧倒的に少ないと思うんですね。</u>なので、やっぱりその、<u>海であったりとか、あんまり行ったことがないけども、まあ少しでもその雰囲気を感じて、あ～海行ったことないけど、こういう音がするんだな～、とかそのぐらいでも思ってくれるのは難しいかもしれないんですけど、まあ感じ取ることができたらいいのかなという感じですね</u> (中略) やっぱりその季節と曲をからめて、そうですね、もしこのこの子たちが卒業した後とかに、その <u>まあ どこかの施設に利用して行ったときとか、やっぱりその音楽が流れていることって多いんじゃないのかなって思うんですね。</u>だからそこで、たとえばあめふりくまのことが、<u>夏だったらみなみのしまのハメハメハ大王とかが流れて、⑤あつ、これ学校で、昔聴いたことあるな～って思ってくれて、それで、ああなんかちょっとなじみがあって、なんか楽しかった気がする、なんかそういう感じで、うん、子どもたちがなんか思ってくれるだけでも、私はほんとに重度の子はいいのかなって思ってます。</u></p>
D 教師	<p>あとは、教科書にあるお歌、あとは季節の歌みたいところで入れているかな？</p>
E 教師	<p>単元っていうのがあるんです。例えば春の小川は明らかに春の わかりやすいと思うんですけど、季節の歌ってことで使用していました。</p>

情緒の安定と「遊び」をもたらすための音楽の活用

教師は音楽をコミュニケーションや教材として用いる一方で、音楽を情緒的安定のために活用しているということも多く語られた。たとえば、C教師は「気持ちの面で、情緒的な面で、働きかけることができるのが音楽なのかな（表5波線①）」と述べているように、音楽は情緒に働きかけられる

表5 情緒的安定のための音楽

C 教師	<p>やっぱりその一番はなんかその①<u>気持ちの面で、情緒的な面で、働きかけることができるのが音楽なのかな</u>っていうふうに思うし、ほんとに字の通り、音を楽しむってところで、ほんとになんだろ、嫌いになってほしくないな、②<u>やっぱり音楽って楽しいんだよとか、音楽って聴いて心地よいよねとか、そういうふうになるものなのかな</u>っていうふうに思います。情緒的なところで伸ばせる可能性をもっているのが音楽。</p> <p>(中略)</p> <p>ゆったりした曲がかかったら、気持ちもあと③<u>身体の緊張とかもリラックスしていけたらいいな</u>とも思う。</p>
E 教師	<p>ごほうびとか癒しとか、なんかほんとに癒される気持ちになるような <u>なんていうか存在みたいな</u>そういう、なんかいろいろありますよね、きっと。音楽の授業以外の音楽って、多分すごくいろいろあると思うんですけど。</p> <p>(中略)</p> <p>私も肢体不自由児の関わり年数が少ないので、なんとも言えないんですけど、好きな子にとっては、肢体不自由児っていうよりかは、音楽ってなんか基本どんな人にとっては、なんていうか共通の余暇、やっぱ楽しい。…音を楽しむのが音楽なのかなって。肢体不自由児だからって、④<u>肢体不自由児に限定するのはちょっと難しい</u>ですね。肢体不自由児でも幅はありますよね。…嫌いな人もいますからね、なんかね。好きな人は好きでいいと思うんですけど、⑤<u>心地よい存在であってほしい</u>ですよ。…<u>楽器とかもあるしね、歌だけじゃなくてね。歌嫌いな人もいるからね。音とかもね。音とか苦手な人はキーってなっちゃうしね</u>。でも決して嫌いなわけではないと思うんですけど、親しんでほしいなと思います。</p>

表6 肢体不自由児にとっての音楽

A 教師	<p>私はあんまり子どもたちと楽しいとか悲しいとか感情レベルに関しては私たちも子どもたちも差がないと私は思っているの、①<u>肢体不自由児にとって</u>というか、<u>多分私たちと同じ</u>だと思います。好きな音楽は各々違うと思いますし、そのその時の自分の気持ちとか感情によって聴きたい音楽も違うだろうし、ただちょっと不自由があるから、聴きたいけど聞けないっていう時はすごくあると思うんですけど、音楽をする、聴くことでリラックスも私たちと同じようにできると思うし、わくわくの気持ちももてると思うので、なんか②<u>生活を豊かにするツールの一つ</u>かなって感じにはします。</p>
B 教師	<p>別に私は肢体不自由児にとっての音楽とか、例えば健常児にとって、知的障害児にとってとか特に違いはないと思います、私は。ただその音楽を、そうだね、③<u>音楽って</u>いうもの</p>

	<p>は誰にとっても平等というか同じであって、ただその例えば楽器に興味があるけれども、楽器を演奏するときに必要になってくる支援が知的とか肢体不自由ではそれぞれ別なんだろうなって、その程度の認識です。</p>
--	---

ものであることを指摘した。それは、「やっぱり音楽って楽しいんだよとか、音楽って聴いてて心地よいよねとか、そういうふうになる、ものなのかなっていうふうに思います」と述べているように（表5波線②）、C教師は音楽のそもそもの意義を強調した。そのため、音楽を効果的に活用することによって「身体の緊張」をほぐし、リラックスへとつながるものであると捉えていた（表5波線③）。

この点については、E教師も「肢体不自由児に限定するのはちょっと難しいですね（表5波線④）」と明確に述べている。すなわち、音楽が好きな人もいれば、嫌いな人もいるけれど、「心地よい存在であってほしいですね（表5波線⑤）」と述べているように、音楽との関わりを持ち続けてほしいという思いをもっていた。

このように、肢体不自由特別支援学校の「音楽」には、「肢体不自由児に特有の使い方」があるというわけではなかった。そうではなく、むしろ肢体不自由児にとっての音楽とは、「多分私たちと同じ」であり（表6波線①）、人間として共通した「生活を豊かにするツールの一つ」であるとA教師は語った（表6波線②）。B教師も同様に、「音楽っていうものは誰にとっても平等（表6波線③）」と発言しているように、支援の方法以外は基本的に同じであると考えられた。

以上のように、音楽は、肢体不自由特別支援学校の教師は音楽のもつ情緒的側面にも目を向けていて、私たちと共通した「楽しみ」の一つとして位置づけて音楽を活用していることが明らかになった。

まとめと考察

本研究は、肢体不自由特別支援学校で用いられている音楽活動について、どのような意義やねらいがあるのかについて教師のインタビュー調査から明らかにした。その結果、①「生活リズムを生み出す」ために音楽を活用し、活動に意識を向けられるようにするために音楽を活用しているということが明らかになった。これは、②コミュニケーション・ツールとして音楽を活用しているということでもあり、学習内容を伝えたり、季節を意識づけ、自然を感じるといった教材としても活用されていた。一方で、③情緒的安定を図り、生活全般の「楽しみ」につながってほしいという思いともって音楽は活用されていることも明らかになった。これは、肢体不自由児教育に特有の考え方ではなく、人間として「音楽」を活用する普遍的な意義であると考えられる。

このように、教師は「肢体不自由児だからこうした音楽の活用方法がある」と述べているのではなく、音楽が人間の生活にとって不可欠なものであり、人間の情緒の安定や楽しい雰囲気づくりに大きく貢献するものだからであると考えていたことが明らかになった。すなわち、音楽は重度重複障害児にとって、生活全般を支えるものであるばかりでなく、時には言語的に（コミュニケーション

ン・ツールとして)、時には情緒的に(気持ちの安定として)活用していた。これは、肢体不自由児教育において音楽が単なるバックミュージックとして用いられているのではなく、広く一般的な子どもと同様に、生活を安定させるため、あるいは、学習活動を促進するために音楽は多様に活用されているということを示唆していると考ええる。

引用文献

- ・中山昌也・小林重雄. 2000. 「重度・重複障害幼児の自発的行動に及ぼす音楽の影響」『特殊教育研究』第37巻第5号, 69-77.
- ・関原彩子. 2008. 「重度重複障害児の音楽療法的視点を取り入れた音楽科の指導：原初的コミュニケーションとしての音楽に注目した『振り返りの対象』としてのカリキュラム作りについて」『学校音楽教育研究』第12号, 86-87.
- ・丹波美由紀・大谷正人. 1997. 「養護学校における音楽教育の現状と音楽療法応用の可能性」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』第48巻, 199-216.